

組織目標評価報告書（平成24年度）

部局名：大学院医歯薬学総合研究科(歯学系)

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
①教育領域	
自己評価	
①-1 目標	1) 大学院履修コースの充実 ●一般コースおよび臨床専門医コースの各分野シラバスを充実させた。 ●基礎系分野と臨床系分野が協力して、融合研究を進めることができるよう、委託教授制度を確立した。 ●特徴的な連携講座として、分子イメージング科学(理化学研究所)、総合感染症学(国立感染症研究所)、長寿医療科学(国立長寿医療研究センター)、レギュラトリーサイエンス学(医薬品医療機器総合機構)を設置した。分子イメージング科学に関しては、文科省の「岡山分子イメージング高度人材育成事業」として、10月6日、7日に講義シリーズを開催した。 ●臨床専門医コースの1年目に受講することを必須化した「研究デザインワークショップ」の参加者を全国公募して、8月4日、5日に開催した。 ●留学生の増加に対応して、5月～6月にかけて12回、英語の授業である「メディカルサイエンス講義シリーズ」を開催した。
1) 大学院履修コースの充実 (背景:大学院生のニーズの多様化と融合型教育に対応するため) 一般コースと臨床専門医コースを中心とする履修コースを充実させる。基礎系・臨床系分野が協力し歯学系独自の研究(融合型)と教育を推進する。研究デザインワークショップを歯学系として継続する。留学生の増加に対応して、一部の授業の英語化を試みる。 2) 優秀な大学院生の育成 (背景:大学間ネットワーク「口腔からQOL向上を目指す連携研究」による) 大学院生の研究、国際学会出席、短期留学を支援し、国際的に通用する研究能力を持つ大学院生の育成を進める。国内外の他大学との連携強化に努める。 3) 大学院生の確保 (背景:研究マインドを醸成し、研究活動を活性化するため) 歯科研修医等の研究マインドの醸成に努める。一般コース、臨床専門医コースの説明会を学部生や研修医に向けて行い、大学院生の確保に努める。交流協定を結んだ大学等から優秀な大学院生の留学を促進すべく、国際交流事業を促進する。 4) 学務機能の電子化の推進 (背景:大学院生の履修自己管理を可能とするため) 大学院のポートフォリオシステムのブラッシュアップを行う。	
①-2 目標とする(重要視する)客観的指標	2) 優秀な大学院生の育成 ●文科省の教育研究経費である「口腔からQOL向上を目指す連携研究事業」を推進し、大学院生の国際学会出席支援、短期留学支援を行った。また、本活動の一環として先端歯学研究サマースクールに参加し、他大学との連携強化に努めた。 ●歯歯薬学の融合研究をさらに進めるため、「ブレインストーミング in 直島」に参加し、他分野の研究に触れる機会を増やし、モチベーション向上に成功した。 3) 大学院生の確保 ●本年度も大学院の説明会を研修医や臨床実習生に向けて開催し、歯学系の責任枠を超える大学院生(38名[責任枠:32名])の確保に成功した。 ●部局間交流協定を結んだベトナム、ハイフォン医科大学から大学院生を1名受け入れた。ハイフォン医科大学には、学部長と歯科矯正学教授が訪問し、大学院生や交流研究員のリクルートを行った。また、この活動をベースに日本学術振興会「研究拠点形成事業」に申請した。 4) 学務機能の電子化の推進 ●大学院GP事業で開発した大学院ポートフォリオシステムの改修のため、大学院学務システム電子化WG委員会を継続的に開催し、大学院生や学務担当事務にとって使いやすいシステムに改修した。
②研究領域	
自己評価	
②-1 目標	1) 歯学系融合型研究の推進 ●歯学部将来構想検討WG会議を開催し、若手教官が自主的に研究セミナーを開催する「バイオフィオローム」が始動した。 ●歯学部先端歯学研究センター(仮称)を設置する計画が進んでいる。本センターの活動には、基礎と臨床研究の融合、トランスレーショナル研究の推進が含まれている。本センターには、機能系や形態系共同研究室に所属している助教が移動する予定である。 2) 新しい学際研究の推進 ●理化学研究所との連携を進めている「分子イメージング科学」に関しては、医学系、薬学系とともに研究交流を積極化させ、文部科学省「岡山分子イメージング高度人材育成事業」を遂行するとともに、平成25年度「文部科学省 特別経費(プロジェクト)」に「分子イメージング・マイクロドーズ(第0相)臨床試験体制を擁する分子標的治療研究・教育拠点の構築—理化学研究所との連携—」として申請した。 ●リン酸化プルランを用いた、①殺菌剤デリバリー型の口腔ケア製品、②接着性を有する生体吸収性(骨置換型)の骨補填材、③埋植型医療機器に薬剤を融合したコンビネーションプロダクト、④薬剤の徐放を精密制御できるドラッグデリバリーシステムなど、産学官連携プロジェクトがスタートしている。各医用材料、医療機器に関してもA-STEP起業挑戦タイプ(1.65億円/3年)や復興促進A-STEP(800万円/1年)を始め様々な支援を受けて開発を進めている。また、本プロジェクトは革新的医薬品・医療機器・再生医療製品実用化促進事業(筑波大学班:整形・歯科領域、コンビネーションプロダクト)より薬事に関する支援も受けており、国内でも有数の産学官連携プロジェクトとなっている。
②-2 目標とする(重要視する)客観的指標	
③社会貢献(診療を含む)領域	
自己評価	
③-1 目標	1) 医科との診療連携を推進する ●特殊歯科総合治療部を改組し、医療支援歯科治療部やスペシャルニーズ歯科センターを設置した。これらは、岡山大学病院における多職種連携活動の歯科的な核になるべき組織である。医療支援歯科治療部は、助教2名体制でスタートしたが、歯科の健康保険に周術期管理料が導入されたこともあり、准責任者である1名には准教授ポストが与えられた。 2) 地域の医療機関との連携を促進し、中核病院としての機能の充実を図る。 ●大学病院では、教育資源の適切な確保の重要性を強調しても強調しすぎることはないが、地域の中核病院としての後方支援機能も強化する必要がある。地域から、難易度が高い患者を紹介していたくシステム作りをするために、歯学教育関連病院会議(仮名称)を準備中である。 ●口腔検査センターを開設し、地域の歯科医師の口腔検査の需要に応えるシステム作りを開始した。 3) 各専門診療科は増収に努めた結果、歯科診療報酬請求総額は、ここまでのところ前年度比増額で着地した。また、医療費率の軽減に継続して努力している。 4) 画像診断システムのデジタル化に対応した医療情報システムに改修した。 5) 研究の項目の2)が良い例であるが、他にも、多数の臨床学官の連携により、新しい医療機器や治療薬の研究が進んでいる。
③-2 目標とする(重要視する)客観的指標	
【総括記述欄】	
全般的には、全国国立大学歯学部の中でも、研究業績、科学研究費の取得状況、産学官連携、多職種連携教育など状況はよい。来年度は、国際交流事業をさらに進めるべく、国際シンポジウムを開催予定である。	